そんな日々

飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そんな日々

【Ｎコード】
Ｎ９２１１Ｍ

【作者名】
飴

【あらすじ】
高３である中野　陸・杉原　卓哉・佐藤　駿・阿部　春樹はただその日その日を平凡に暮らしいる。そんな平凡な日々を変えるものは存在するのかしないのか。

～プロローグ～（前書き）

文体がおかしかったりしますが読んで頂けたら幸いです。

～プロローグ～

７月３１日（土）　晴れ
午前１０：３５

『……暑い。』

中野　陸は夏には大概の人が感じる事を心の中で呟いた。
別に涼しくなるわけもなく気のせいか日差しが強くなったような気がした。

『なんで俺が……。』

今度は口に出してみたが傍に誰もいないので答えが返ってくるわけもなく虚しく歩を進める。
何故彼がこの炎天下の中、歩いているのかについては昨日の昼の会話が関係してくる。

『……暑い。』

７月３０日（金）　晴れ
午前１２：５０

『花火やんね』

今は夏期講習の期間。
昼休みになりいつも通りのメンバーで昼御飯を食べていると唐突に杉原　卓哉が話題そっちのけな発言をしてきた。

『……花火？』

『そう、花火。夏は花火でしょ。』

確か俺たちは今は弁当にうどんを持ってきた佐藤　駿の事をいじったり、弁当についての話をしていたはずだ。
花火を連想させるワードは出ていないはずだった。

『いやいや今は麺類は学校に持ってくる弁当では有りかどうかって話だったじゃん。』

駿はたぶんここにいる5人全員が思ったであろう杉原の発言につっこんだ。

『いやいや麺類＝そうめん＝夏＝花火でしょ。』

『なんか強引じゃね。』

『いいから、いいから。
『で、いつやるの？』

黙々とコンビニのパンを食べていた阿部　春樹が聞いてきた。

『じゃあ今夜やろう。』

『分かった。』

『分かっちゃたよ。』

『駿も陸もいい？』

『俺いいや。』

『今夜ねぇ……。』

花火と聞いて最初はやってもいいと思ったが今夜と聞くとさすがに考えものだ。

『じゃあ来いよ。』

俺は考える時間も与えらる事もなく参加になってしまった。

『分かったよ。』

今思えばここでちゃんと断っておけばよかったのだろう。

今となっては断った駿が羨ましい限りだ。

『なら今夜１９：００に学校集合な。』

そして俺たちは話題を弁当に戻した。

～プロローグ～（後書き）

読んで頂きありがとうございました。これからも不定期で書いていきます。

～集合?～（前書き）

気が向いたら読んでみてください。

～集合？～

７月３０日　（金）　晴れ
午後１８時２０分

『そろそろ行くか……。』
俺はベッドから起き上がり親に見つからないように玄関に向かった。
仮にも受験生の身であるため花火しに行くとはなかなか言いづらいものがあり、親には黙って出かけることにした。
果たして今夜の花火にそこまでする価値があるのかは俺にはよく分からない。
ただ約束したのだから行かないわけにもいかない。
静かにドアノブをひねり、自転車で俺は学校に向かった。

午後１８時５０分

阿部　春樹はすでに学校の校門まで来ていた。
彼は電車通学のため他のメンバーより来るのが少し早かったようだ。
しかしそれは卓哉も同じはずだが彼の姿は電車では見かけなかった。
『……。』
考えても仕方ないため耳からイヤホンを外し卓哉に電話することにした。

『……。』

しかし卓哉は電話にでなかった。
仕方ないと再びイヤホンを耳に付け待つことにした。

午後１９時３分

陸は学校に到着したがそこには誰もいなかった。

『みんな遅いな……。』

と携帯をいじりつつ待つことにした。

午後１９：１５分

『……遅い……。』

いくらなんでも遅すぎるだろ。
１５分オーバーって何だよ。
『……帰ろかっな。』

そう考えつつ陸は卓哉に電話した。
しかしでない。
『発案者が来なくてどーすんだよ。』

半ば呆れつつ陸は自転車に乗り帰路につこうとした。
……ガシャン。

『……痛ぇ。』

午後１８時５５分

『本当に行くの？』

『今さら何言ってんの。もう学校まで来ちゃたんだよ。』

『でもやっぱり怖いよぉ。』

小池　優は迷っていた。

校内に夏期講習の予習プリントを忘れて来てしまったのだ。

１人では心細かったので友達の橋口　美月に付いてきてもらったのはいいがいざ行くとなると少し怖い。

『じゃあ、あたしここで待ってるかは。』

『ええっ、一緒に行ってくれないの！！？』

『大丈夫、大丈夫まだ明るいほうだから。』

夏真っ盛りであるため日が沈むまで少し時間があった。

『ほら、行った行った。』

まるで犬でも追い払うように美月は優を校内へと追いやって行った。

『絶対待っててよね。』

優はそう言いつつ渋々校内へと足を踏み入れて行った。

～集合？～（後書き）

読んでくださってくれてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9211m/

そんな日々

2011年10月7日15時17分発行